

令和 3 年 5 月 18 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K01163

研究課題名(和文) 現代中国人の歴史意識に関する研究 族譜編纂活動の分析から

研究課題名(英文) A study on the historical consciousness of Chinese through the analysis of the genealogies' compilation

研究代表者

瀬川 昌久 (Segawa, Masahisa)

東北大学・東北アジア研究センター・教授

研究者番号：00187832

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、香港新界の一族の詳細な系譜記録が記された族譜を精密に読み解くことにより、前近代中国の家族生活を再現し、その背後に横たわる親族規範を解明した。本研究は文書記録の分析を通じて、過去の社会状況の解明に挑戦した歴史人類学的な研究である。一族の族譜から抽出された家族形態、養子、祖先祭祀の委託、寡婦、再婚、側室保有などのデータを詳細に分析し、それらを用いて、前近代中国の家族関係の実態とその背景となる親族的価値観や規範を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、族譜は死者の名前や系譜上法のみを羅列した無味乾燥な文書であり、そこから過去の家族の実体を明らかにすることは不可能だと思われてきた。本研究は、族譜という文書資料のみを用いつつ、文化人類学的な親族関係の分析手法を駆使することにより、前近代中国の家族のあり方や超世代的に継承されるべきと考えられていた価値に関する意識を明らかにし得たことは、歴史人類学の研究上、類例を見ない成果である。

研究成果の概要(英文)：In this study, I traced family life in pre-modern China and understood underlying kinship values through a thorough analysis of a genealogical book detailing the genealogical relations of a lineage in the New Territories of Hong Kong. This is a product of my historical-anthropological study in which I have tried to trace past social conditions based on the analysis of written materials. In it, I reconstructed the past status of family relations and investigated into the underlying kinship values and norms in pre-modern Chinese society using the data on family composition, adoption, entrusting of ancestor worship, widowhood, remarriage, and concubinage extracted from a genealogical record of a lineage.

研究分野：文化人類学

キーワード：宗族 族譜 前近代中国 歴史人類学 祖先祭祀 父系出自 超世代的連続性 価値観

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

通常考えられている「族譜」は、今は亡き祖先たちの名前や生没年などを延々と書き記した死者の書であり、人々の肉声や生々しい生活の痕跡は根こそぎ削り取られてしまった、色あせた文字の羅列である。とりわけ、個々の祖先の事績を書き連ねたその本体部分は、子孫でさえそれを通読することに意味を見出し得ないほどに形式化され簡略化された無味乾燥な帳簿に過ぎず、たまたま特定祖先の名前や没年などを調べようと思いついた物好きな老人がめくり返す以外は、その頁に陽が差し込むことなど滅多にない。しかし、中国社会に関心を持ち、その家族や宗族を研究対象としてきた筆者にとっては、「族譜」は常に心のどこかに引っ掛かり続ける存在であった。それというのも、研究対象とする地域や一族の歴史を知るための補助資料として、たびたび「族譜」を斜め読みの参照する機会があったにもかかわらず、それと真っ正面から向き合っ、その内容を一から十まで理解しようとする努力は、一度たりとも無かったからである。本当は一体そこに何が書かれているのか、それを書いた人々は一体何故にそれを記録しようとしたのか、それを記録することによって何を後世に残そうとしたのか、それらのことには目を閉ざしたまま、素通りすることが慣例となってしまう。これは筆者のみではなく、多かれ少なかれ「族譜」というものに触れたことのある研究者の大半も、同様であろうと推測される。

2. 研究の目的

本研究が目指すのは、普段研究者も読み飛ばしてしまうことの多い族譜の本体部分をひたすら丹念に、精密に読み込んでみることによって、そこからどのような家族・親族のあり方が見えてくるのか、またそれらを記録することに対して過去の人々がどのような意識をもっていたのか、ということをも明らかにしてみようという、ひとつの挑戦的な試みである。それはもっぱら過去に書かれた文書を用いて、過去の社会状況や過去の人々の観念を明らかにしようとしたものであるという点で「歴史人類学」的な研究である。これまで、主にフィールドワークによって同時代の社会関係や文化的慣行について研究しようとしてきた筆者にとっては、それはその意味でも新たな挑戦である。

3. 研究の方法

本研究が分析する族譜は、いずれも東京大学東洋文化研究所にコピーが所蔵されている香港新界沙田地区の族譜である。これらは、香港中文大学東亜研究中心が1970年代末から1980年代にかけて収集を行い、同大学の図書館にそのコピーを所蔵しているものであるが、東京大学東洋文化研究所所蔵のものはその孫コピーに当たり、それらは「沙田文献」として一括所蔵されている。同族譜の分析は、以下の手順で行った。すなわち、まずもって当該族譜の内的整合性や矛盾をチェックすることによりその信頼度の評価を行い、しかる後にそれらのデータを用いて各時代の成員数や寿命、婚姻状況、家族構成などを明らかにし、そしてこの一宗族の明代中期から清代後期に至る人口動態を可能な限り再現することを試みた。また、そうした分析を通じて抽出されたところの、父系親族内における養出・養入（養子のやりとり）の事例を子細に検討することにより、族譜を記録し続けてきた彼ら一般の宗族成員たちが、何に価値を見出し、何のために系譜を記録し続けようとしたのかを解明することに努めた。「承継」すなわち父系出自の連続性の担保は、十数世代にも及び長期にわたってそのようにして継続されてきた族譜記録行為の根幹をなす価値意識であり、その実現のために、人口動態上の節目となる諸局面において、人々はさまざまな模索を繰り返してきたことがわかる。

4. 研究成果

本研究は、族譜を補助資料として利用することによって何か他のことを解明しようとするための研究ではなく、族譜には一体何が書かれているのか、族譜に記録された祖先の姿は一体どのようなものであるかについて知るために、黙々と族譜本体を読み込んでゆく作業から成り立っている。つまりそれは、族譜とは畢竟何であるのかを知ろうとする研究であり、またそれを通じて、何のために人々はそれを記録したのかを明らかにしようとする研究でもあった。その意味では、族譜の編纂主体ならびにその記録の対象となった人々が時間の推移やそれを越えた持続性というものについてどのような価値意識を有し、それにしたがって族譜を記録し続けてきたのかの解明にもつながる研究である。

そのためにまず行ったのは、分析対象とした香港新界沙田のW氏一族の族譜の内的整合性や矛盾をチェックすることにより、その信頼度を評価する作業であった。それは、あくまでデータとして含まれている生没年等の数字の形式上の有効性を判断するものではあったが、そこから得られた結果からは、当該の族譜に関してはおよそその8割方において有効なデータを含むものであることを明らかにできた。

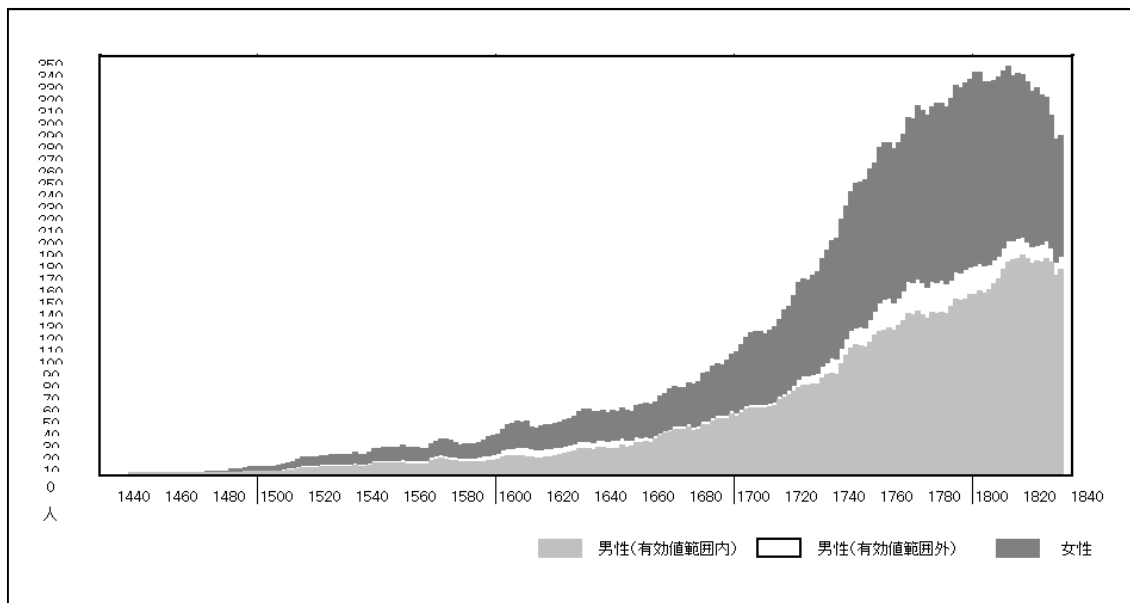
次に、それらのデータの中の信頼できる部分を用いて各時代の成員数や寿命、婚姻状況、家族構成などを明らかにする作業を行った。そして、この一宗族の明代中期から清代後期に至る人口動態を可能な限り忠実に再現することを試みた。そこからは、女子成員についての記録の欠如や妻たちの婚入時期についてのデータの欠如など、族譜という文書の性格に由来する決定的な限

界も明らかとなったが、そのような制約を差し引いた上で、族譜を通じて数百年前に生きた人々の人生の軌跡の細部を再現することも、それなりに可能であることが分かった。

〔族譜記載データの信頼度チェック作業(一部)〕

世	名	生元年	干支	没元年	干支	没年齢	R-Q	生年	没年(ママ)	生年	没年	没年齢	妻数	実子	承継	
								(ママ)	(ママ)	(修正)	(修正)	(修正)				
1	定基	天祐 1	丁丑	嘉靖 20	辛丑	95	326	×	1216	1541	1447	1541	94	1	4	4
	妻 鄧氏	成化 14	戊戌	嘉靖 20	辛丑	74	64	×	1478	1541	1478	1541	63			
2	乾佳	弘治 2	己酉	嘉靖 30	辛亥	65	63	×	1489	1551	1489	1551	62	1	3	3
	妻 黃氏	弘治 1	戊申	嘉靖 32	癸丑	68	66	×	1488	1553	1488	1553	65			
2	創佳	弘治 5	壬子						1492		1492			0	0	0
2	衍佳	弘治 8	乙卯	嘉靖 41	壬戌	68	68	○	1495	1562	1495	1562	67	1	4	4
	妻 黃氏	弘治 10	丁巳	嘉靖 41	壬戌	66	66	○	1497	1562	1497	1562	65			
2	德佳	正德 5	庚午	万曆 24	丙申	83	87	×	1510	1596	1510	1596	86	1	2	2
	妻 王氏	正德 4	己巳	隆慶 2	戊辰	60	60	○	1509	1568	1509	1568	59			
3	浩登	正德 8	癸酉	万曆 9	辛巳	69	69	○	1513	1581	1513	1581	68	1	1	1
	妻 黃氏	正德 9	甲戌	万曆 11	癸未	70	70	○	1514	1583	1514	1583	69			
3	浩業	正德 11	丙子	万曆 5	丁丑	62	62	○	1516	1577	1516	1577	61	1	1	1
	妻 黃氏	正德 11	丙子	万曆 8	庚辰	65	65	○	1516	1580	1516	1580	64			
3	浩確	正德 14	乙卯	万曆 11	癸未	65	65	○	1519	1583	1519	1583	64	1	1	1
	妻 李氏	正德 13	戊寅	万曆 9	辛巳	64	64	○	1518	1581	1518	1581	63			
3	仁懷	嘉靖 6	丁亥	万曆 8	庚辰	54	54	○	1527	1580	1527	1580	53	1	3	3
	妻 李氏	嘉靖 9	庚寅	万曆 9	辛巳	52	52	○	1530	1581	1530	1581	51			
3	仁怡	嘉靖 39	庚申	天啓 6	丙寅	67	67	○	1560	1626	1560	1626	66	1	1	1
	妻 吳氏	嘉靖 40	辛酉	崇禎 2	己巳	69	69	○	1561	1629	1561	1629	68			
3	仁恬	万曆 20	壬辰	順治 8	壬辰	61	60	×	1592	1651	1592	1651	59	1	1	1

〔族譜から再構成される過去の人口動態〕



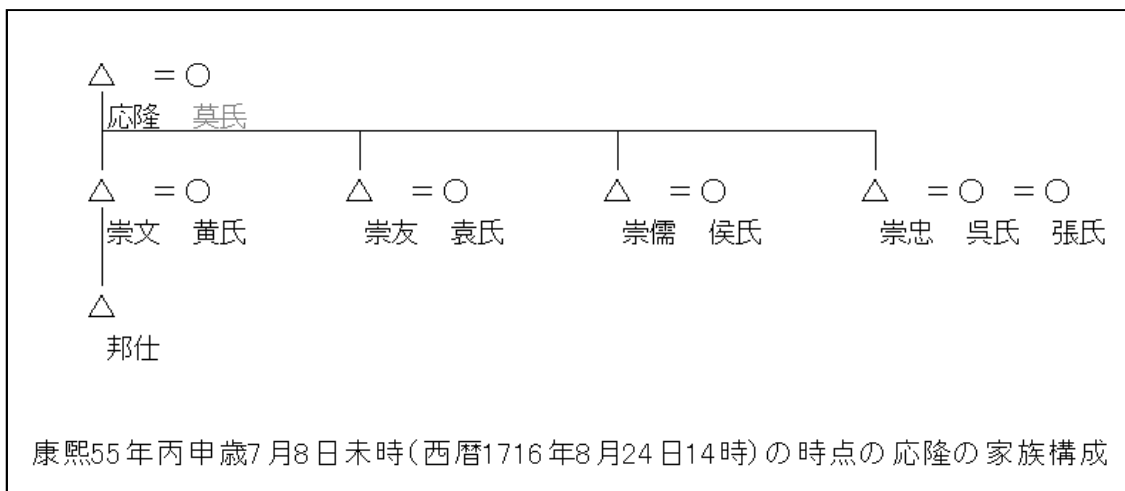
そしてそれらを踏まえて、宗族内部における養子のやりとりの事例を検討し、族譜を記録し続けることの背後に存在した価値意識の解明を試みた。その結果分かったことは、族譜が最も心を砕いているのは祖先の系譜の連続性、特に祖先祭祀の連続性を担保することであったと考えられることである。つまり、祖先祭祀を継承する者がいない「無嗣者」の存在を極力回避しようとする意図こそが、族譜を記録し続ける根本的動機の一つであったと考えられることが明らかとなった。

続いて、以上で行った分析を踏まえつつ、族譜に描かれた個々の祖先の人生の軌跡について、逐一具体的にたどってみる試みを行った。まず、個々の成員が生前に所属していた家族単位の形態と、その経年変化に関わる詳細な分析を行った。そこからは、平均して半数以上の人々が、生前のどこかの時点で傍系型大家族形態の「家族(チアツウ)」単位の一員であった経験をもつことが、数値として確認できた。それと同時に、族員の生没と婚姻状態や息子の数など、極めて表面的で定型的な情報しか書き込まれていないように見える族譜ではあるが、それが逆に中国の意味での「家族」の成員権やその外縁の範囲を明確に示す性格のものであることも明らかとなった。

また、族譜に記載された婚入女性たちのうち、寡婦となったケースを抽出し、その頻度や継続期間等について分析を加えた。寡婦の中には、そのライフ・ステージの最終部分で、息子たち夫

婦を包摂する傍系型拡大家族タイプの「家族（チアツー）」単位の頂点として、いわば「家長」に準ずる位置づけにあった者も少なくないことが見いだされた。そして、この場合の寡婦の存在は、亡き夫を代替する表象物として、その「家族（チアツー）」単位の解体を留保させる役割を果たしていたとも考えられることを示した。

〔族譜資料から再構成された過去の家族構成〕



さらに父系出自の連続性担保のための「承継」養子の養取や「附祭」等の事例を、個別的に詳細に分析し、人々の具体的なライフ・ステージの多様なあり方を明らかにした。そして、父系出自を継承する子孫の確保が不可能になった場合に生じる原則からの逸脱や乖離こそが、逆説的に人々をして族譜を記録し続けさせる根本の動因となっていたと考えられることを示した。すなわち、男系子孫に恵まれないことによる分節の非対称、祭祀の不履行、「絶房」などなど、原則からの乖離によって、宗族の歴史は一回起的で固有な歴史となるのであり、族譜が書き留めているのは結果的にそのような「理想からの逸脱」の軌跡に他ならないからである。

そして、再婚や側室の保持によって複数の妻がいた事例の分析をもとに、そのようなケースとそこから誕生した息子の数の関係について分析した。父系出自の系譜の継承にとって、次世代に男子の成員が確保できるかどうかは重要な条件であるが、そのような男子の確保にとって、初婚の妻が息子の無いままに死去した後に後妻を迎えて男子の出生を試みることや、側室をもってより多くの男子を得ようとする措置は、一定の補強効果をもつものであったことが明らかとなる。ただし、父系出自のシステムの維持にとって、それが必須のものであったということまでは言えず、再婚や側室保持のケースには、それぞれ個別の条件や動機が作用していたことが推測されることを明らかにした。

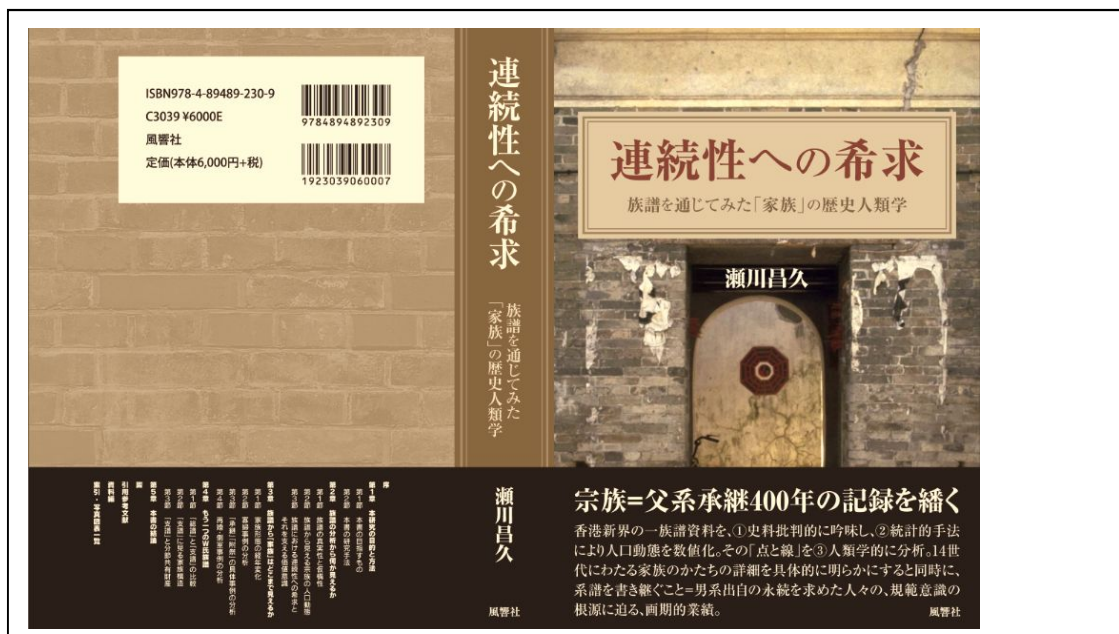
以上のW氏一族全体の族譜(「総譜」)の分析に加え、その一部の分節が作成・保有していた「支譜」の分析を行った。まず、「支譜」の記載と「総譜」の記載とを比較し、相違点について検討した。「総譜」との比較で顕著なのは、「支譜」では宗族内に生まれた娘たちへの言及が散見される点である。ただし、このような娘たちを族譜の記載対象に加えようとする事象を、近代化や家族観の変化などと直裁に結びつけて解釈することに対しては、慎重であるべきことを述べた。

続いて、この「支譜」の記載を基に、「総譜」がカバーするよりも後の時期の家族形態の変遷や、「承継」養子の養取事例などについて分析を加えた。そしてその中で、夭折や「無嗣」などイレギュラーな死を遂げた者たちの系譜継承者を確保しようとする行為について、それはあたかも死者のために不朽の墓石を立てるように、その存在を宗族の歴史の中に恒久的に記し続けるための行為であり、後継者という存在こそが宗族の子孫たちをしてその祖先の存在を認識・想起させる形象物に他ならないと考えられることを示した。生きた子孫という目に見える徴を欠く祖先やその分節については、人々は具体的に認識する術をもたないからである。

そして、特にこの「支譜」に詳述されているところの、分節共有地の存在やその権利関係などについて分析を行った。そこでは、「総譜」が宗族成員間の父系出自の系譜関係や、その継承のための養取措置、「附祭」措置など、宗族構造のフォーマルな骨格に当たる部分を淡々と書き連ねているのに対し、「支譜」はその背後に隠れた分節の共同活動の具体的な運営方法や、成員間の感情的対立さえも垣間見せる記載を含んでいることを明らかにした。

以上が本研究の大まかな内容であるが、こうした分析の成果を、最終年度には著書としてまとめ、学術書『連続性への希求 族譜を通じてみた「家族」の歴史人類学』(瀬川昌久著、東京、風響社、2021年2月)として公刊した。研究は随所において族譜の記載内容を可視的に分析してゆくために、記載データを整理して作成した数多くの表や図を用いた。また、分析のために、系図や人口動態に関わるグラフ、そして家族形態の経年変化についての表など、膨大な資料を作成した。これらは全て、上掲書に収録されている。

〔成果出版物表紙〕



〔「跋」より抜粋〕

これは「家族」についての研究である。しかし、「家族」についての研究ではあるが、そこには娘たちの嬌声も、老人の唄れたつぶやきも、竈から立ち上る白い湯気も、門口に張られた対聯の色あせた朱の色さえも、およそ家族たちの日常の営みを感じさせるような事物は一切出てこない。そこに見える人々の姿は、そうした日常の音声や色彩を根こそぎそぎ落とされ、ただ親として、子として、嫁として、夫として、互いの関係性の網の目の中で黙々と生きては死んで行った、一種無機質な人の群れである。なぜならばこれは、「族譜」という特殊な記録だけを頼りに、それを覗き窓とすることによって、かすかな影のようにそこに見え隠れしている過去の時代の家族の姿を、どこまで身近に理解することができるかに挑む試みだからである。その試みに関しては、ある程度の成果に到達することができたと言える。その無味乾燥な体裁に反し、族譜からは過去に生きた人々の人生の輪郭を、それなりの具体性とリアリティをともなったものとして取り出すことができるということを本書は証明し得たと考える。

〔附記〕

筆者はこれまで数多くの科研費を獲得してきたが、本課題はおそらく筆者としては最後のものとなるであろう。その最後の科研費による研究の成果を、早々に学術書の形で世に公開できたことに対しては、筆者としては特別な感慨を抱いている。ここに、関係各位に厚く謝意を表したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 瀬川昌久	4. 巻 24
2. 論文標題 族譜を通じてみた家族像 香港新界沙田W氏一族における「家（チア）」単位の経年変化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東北アジア研究	6. 最初と最後の頁 1-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 瀬川昌久	4. 巻 23
2. 論文標題 連続性への希求 香港新界沙田W氏族譜の内容分析を通してみる系譜意識	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東北アジア研究	6. 最初と最後の頁 1-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 瀬川昌久	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 574
3. 書名 連続性への希求 族譜を通じてみた「家族」の歴史人類学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------